

2020 年 12 月 5 日

待降節第二主日

菊地功大司教 メッセージ

わたしたちが生きている今のこの世界には、「主の道を備え、その道筋をまっすぐにせよ」と声をあげる存在が必要です。神の招きに応え、その使命に徹底的に生きる存在が必要です。

教皇フランシスコは、使徒的勧告「喜びに喜べ」の冒頭で、「(主が) わたしたちに望んでおられるのは聖なる者となることであり、平凡で風味に乏しい、曖昧なものに留まることではありません」と記して、神からの招きである聖性の道を徹底的に生き抜こうとする存在が不可欠であることを指摘しています (1)。

もちろん教皇は、聖性の道への招きは、特別な人だけへの呼びかけではなくすべてのキリスト者に向けられた呼びかけであることを強調されますが、同時に「教会が必要とするのは・・・まことのいのちを伝えることに燃えて献身する、熱い宣教者だ (138)」と記して、司祭や修道者の聖性の模範が信徒に先立つものとして重要であることも指摘されています。

教会は、聖性の道を歩む模範となる司祭や修道者を必要としています。洗礼者ヨハネのように、勇気を持って先頭に立ち、信仰における正論を声を上げてあかしする存在を必要としています。

教会は、12 月の第一主日を教皇庁宣教授助事業・使徒聖ペトロ会が呼びかける「宣教地召命促進の日」と定めています。今年はこの待降節第二主日、全世界のカトリック教会は、宣教地における司祭や修道者の召命に思いを馳せ、加えてその養成者を思い起こし、ともに祈りをささげます。また宣教地における教会が豊かに成長する道に心をよせ、司祭職や奉献生活者を目指して養成を受けている神学生や修練者を支援するために献金を捧げます。

宣教地と言うことでは、日本の教会もアジアの他の多くの教会と同様、その国にあっては少数派ですから、宣教地の召命促進の祈りには、当然日本における召命促進も含まれております。

司祭は、どこからか自然に誕生して、小教区共同体に与えられる存在ではありません。教会は会社のような組織ではありませんから、毎年のように募集をして、司祭を雇用するようなところではありません。司祭は、自分たちの教会共同体から生み出され、育てられ、歩みをともにする存在です。

主イエスは、突然大人としてこの世界に出現したのではなく、聖書に記されているとおり、幼子として聖家族のうちに誕生し、その聖家族の絆のうちに育まれ成長していきました。共にいる神がそのようにしてわたしたちと関わるのですから、洗礼者ヨハネのように、勇気を持って先頭に立ち、信仰における正論を声を上げてあかしする存在、すなわち司祭も、同じように家族の絆、すなわち教会共同体のうちに誕生し、育まれ、成長する存在であります。

第二バチカン公会議の「司祭の養成に関する教令」は、「召命を育てる義務は、キリスト教共同体全体にある。この共同体はとくにキリスト教的生活を十全に生きることによってその義務を果たさなければならない (2)」と記しています

わたしたちは、日本において、そして世界各地において、「主の道を備え、その道筋をまっすぐにせよ」と勇気を持って率先しながら正しい声をあげる存在、すなわち司祭がひとりでも多く誕生するように、粘り強い祈りと犠牲をささげる心、そしてわたしたち自身の信仰の養成を深めることによって、貢献していきたいと思えます。